

弔 辞

謹んで大分県地方史研究会会長 大分大学名誉教授 文学博士渡辺澄夫先生のご霊前に弔辞を捧げます。

先生は、最愛の奥様の、まさに後を追って逝かれました。奥様のご葬儀の日、少しお疲れぎみかな、とは思いましたが、渡辺先生が倒れた、との知らせが翌日こようとは・・・、自分の耳を疑ったのは私一人だけではないと思います。

先生は、肝炎でご入院以降、特に健康には留意され、毎日の強歩と独自の体操、食べ物の管理を続けられ、その元気さは周囲の者を驚かせるばかりでした。いろいろな会合ではじめてお目にかかる方に「私は明治生まれでして・・・」とおっしゃると、誰もが「うそでしょう」というほどでした。最近こそ少し耳がご不自由になりましたが、そのほかは至って健康で、我々は「渡辺先生は百まで大丈夫・・・」と思っておりましたのに、こんなに早くお別れがこようとは夢想だにしておりませんでした。

先生は明治四十五年大分県玖珠町に生まれ、広島文理科大学を卒業ののち昭和十四年八月母校である大分県師範学校に勤務され、以来戦中戦後の混乱や学制の変化のなかで学芸学部、教育学部と実に三十五年八か月の間、一貫して大分大学に勤務され、自らのレベルの高い研究と学生の教育・研究指導、さらには附属図書館長・評議員として大学運営にも尽力されました。先生の退官の際の講演でも「将来はいざ知らず、現在のところ最長記録であろう」と語っておられます。大分大学退官後は直ちに別府大学文学部教授となられ、こでも八十歳で平成五年三月退かれるまで、十七年にわたって教育研究に専念されました。まず、驚くことはすべてのスパンの長さです。そして、しかもその間の業績が大変充実していることは、超人的、という言葉しか知りません。

先生の生涯のご功績は大きく三つに整理できると思います。

その第一は、畿内荘園の基礎構造に関するものです。東京大学内地留学中の先生の一心不乱の勉強ぶりは、今も東大文学部・

史料編纂所の伝説となっているそうです。その成果を生かしての大和国池田荘・若槻荘を初めとする精緻な分析の結果、畿内の地域的特質の中で生まれた均等名荘園を見いだすなど大きな業績をあげられました。これは昭和三十一年『畿内荘園の基礎構造』として出版されました。その後学術書としてめずらしく増訂版が出されております。この研究により昭和三十五年に学位を授与されます。この流れにあるものとして『大和若槻荘史料』があります。

第二は豊後・豊前を中心とする九州中世史の研究です。『大分県史料』『九州荘園史料叢書』『豊後国大野荘史料』の編集刊行、さらには昭和五十九年から始められ、現在までに十二巻を刊行し、残り一卷となった『豊後国荘園公領史料集成』の編纂は、ほとんどお一人でやられ、先生最後の一大事業となりました。そのなかで昨年の四月に公刊された「豊後国における皇室領荘園の研究」にいたるまで数多くの九州荘園・公領の特質に関する研究があります。

九州中世の政治的研究では、豊後国府の位置比定、緒方惟栄、豊後守護大友氏の出自やその豊後下向と領国経営、家督相続など幅広くかつ深い研究内容で、多くの論争や波紋を呼んだものがあります。とくに大友氏の最盛期である義鎮（宗麟）時代についても政治情勢・領国経営・キリスト教との関係など数多くの成果をあげ、『増訂豊後大友氏の研究』となっております。そして編纂審議会会長であった大分県先哲叢書の『大友宗麟』の監修者としての仕事ぶりは、八十歳を過ぎた方ものとは思われない、エネルギーシユなものでした。

そして第三は大分県の歴史研究・文化財保護活動のリーダーとしてのご活躍です。大分県地方史研究会ではその創立の昭和二十八年以来委員長、五十年からは会長を兼務され、会誌『大分県地方史』の編集・発行の責任者として今日まで実に四十四年間先生にお世話になりました。とくに創立期の運営のご苦労は大会の度に話され、研究は現地調査や史料を基本とすることと研究会としては日常の研究活動の継続の重要性をお示しいただきました。地道な優れた研究者への「大分県地方史研究奨励賞」を提唱し、基金を提供されたのも先生でした。昨年十一月大分県地方史研究会が地域文化振興の功労団体として文部大臣表彰を受けたのも、一重に先生のお陰であり、この表彰への感想を『大分県地方史』一六四号に書かれたのが遺稿となつてし

まいりました。

渡辺先生は研究の成果を一般に普及する活動として『大分県の歴史』『大分の歴史』『角川大分県地名大辞典』『大分歴史事典』『大分歴史人名辞典』などの編著を行われました。また『津久見市誌』『豊後高田市史』など数多くの県内の市町村史誌の執筆・監修もされております。とくに先生自ら県当局に働きかけて実現した『大分県史』の編纂には自ら中世篇の重要部分執筆されるいっぽう、編纂審議会副会長・専門委員会会長として全体に目を配られました。その完成は先生なくしては考えられないものです。また、その学識をいかして文化財保護活動にも意を注がれ、昭和五十一年から平成四年まで十六年間、県文化財保護審議会会長として活躍されました。

先生は、早く昭和四十一年には大分合同文化賞、四十二年には西日本文化賞、四十九年には大分県文化功労者表彰、そして昭和五十八年には地域文化功労者文部大臣表彰、翌五十九年には勲三等旭日中授賞を受賞されております。

先生はまさに率先垂範の方でした。そして、まじめな研究にはどんなに若い者であっても真摯に受け止められました。きびしさと温かさを兼ね備えられた方でした。私たちは、先生の「おおきに ご苦労さんでした」という言葉に何度励まされたかしれません。

私たちが敬愛した偉大な渡辺澄夫先生は最後まで現役の歴史研究者でしたが、その先生も遂に逝ってしまわれました。残された我々はこれからどうすればよいのか、今はただ呆然自失の感のみです。しかし、停滞は先生の望まれることではない、と思います。先生がおっしゃっておられたように、常に原点にたち、研究活動を継続していき、さらに後進を育てて一步一步進んでいくことが、先生の御恩に報いることではないか、と思い頑張ることをご霊前にお誓いします。

渡辺澄夫先生、安らかに眠りください。

平成九年一月十八日